富山県新湊市

高島A遺跡発掘調査概要

民間ドライブイン造成に伴う高島A遺跡発掘調査

1999年度

2000年3月

新湊市教育委員会

富山県新湊市

高島Ａ遺跡発掘調査概要

民間ドライブイン造成に伴う高島Ａ遺跡発掘調査

１９９９年度

２０００年３月

新湊市教育委員会

序

新湊市は肥沃な射水平野のもっとも低いところにあります。天然の良港である放生津潟を擁し、縦横に走る河川によって周辺の地域と結ばれ、水の利、地の利を活かして、古くから日本海側の海運と漁業の拠点として発展してきました。

本書は、民間のドライブイン造成に伴って調査を行なった高島A遺跡の調査報告書です。高島A遺跡は、射水平野の重要な河川の一つである神楽川の流域に立地し、弥生時代の遺跡として知られてきました。

高島A遺跡として初めて発掘調査を行なった今回の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓などが発見され、この時期にはすでに人々がこの地に定住し、生活を営んでいたことがわかりました。遺跡は周囲に広がることがわかっており、今後の調査によって新たな発見が期待されます。

この報告書は十分ではありませんが、より多くの方に活用され、文化財保護の一助になりましたら幸いです。

終わりになりましたが、調査にあたり多大なご協力とご援助をいただきました、全ての関係者の方々に深く感謝を申し上げます。

平成12年3月

新湊市教育委員会

教育長　糸　岡　栄　吾

例　言

1　本書は、富山県新湊市作道・鏡宮地内に所在する高島A遺跡（203028:県遺跡番号）の発掘調査概要報告書である。
2　調査は民間ドライブイン造成に先立ち、新湊市教育委員会が主体となり実施した。調査に当たっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受け指導と協力を得た。
3　調査事務所は新湊市教育委員会社会教育課に置き、社会教育課長　大代政幸が調査事務を総括した。また、調査に当たっては富山県埋蔵文化財センターをはじめ有限会社鷲塚屋、株式会社牧田組、有限会社数寄屋住宅研究所、新湊市シルバー人材センターの協力を得た。記して謝意を表したい。
4　調査期間、調査面積は次のとおりである。
　調査期間：平成9年4月14日～平成9年4月28日（実働11日）
　調査面積：４００㎡
5　発掘調査担当者は次のとおりである。
　新湊市教育委員会社会教育課　文化財保護主事　宗　　融子
　富山県埋蔵文化財センター　〃　　高梨　清志
6　調査参加者は下記のとおりである。
(現地調査)（敬省略　五十音順）
　今井　清　　浦上澄子　　酒本富峻子　　三箇勝義　　塩谷　清　　作道喜代則　　寺崎友治
　藤田みよ　　矢野吉次
7　本書の作成は、下記の協力をうけて宗が行った。
(室内整理)（敬省略　五十音順）
　浦山みこと　　楯井悦子　　立野浩美　　前田三津子
8　調査の準備から報告書作成にあたっては次の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して敬意を表したい。
（敬省略・順不同）
　久々忠義　　高梨清志　　越前慶祐　　栗山雅夫　　小松有希子
　また、遺物写真撮影の際には、高梨清志氏に大変お世話になった。重ねて厚く感謝申し上げる。
9　本書の土層の色調は、小山忠正・竹原秀雄編著1994『新版標準土色帖』に準拠している。
10　採集遺物、記録図面等は新湊市教育委員会が一括して保存・公開している。
11　本書の図面・写真図版の表示は下記のとおりである。
(1)　遺物実測中のスクリーントーンの貼り込みは次のとおり表現した。
　赤彩　須恵器　珠洲焼

目　次

序　文
例　言
目　次

Ⅰ　はじめに……1
　1　遺跡の位置と環境……1
　2　調査に至る経緯と経過……2
　　(1)　遺跡の発見……2
　　(2)　調査の経緯と経過……2
Ⅱ　調査の概要……3
　1　調査の方法……3
　2　遺構・遺物……3
　3　まとめ……5

【付篇】
新湊の弥生・古墳時代について
　1　はじめに……15
　2　遺跡概要……15
　3　まとめ……16

図版
　第1図　新湊市位置図
　第2図　遺跡の位置と周辺の遺跡(1/50,000)
　第3図　調査区域図(1/10,000)
　第4図　調査区割図(1/500)
　第5図　遺構全体図(1/80)
　第6図　遺構断面図(1/40)
　第7図　遺物図(1/3)
表
　表1　高島A遺跡遺物一覧表
写真図版
【付篇】
図版
　第8図　射水平野における弥生・古墳時代の遺跡(1/50,000)
　第9図　遺物図(1)(1/3)
　第10図　遺物図(2)(1/3)
　第11図　遺物図(3)(1/3)
　第12図　遺物図(4)(1/3)
表
　表2　弥生・古墳時代遺跡の消長表
　表3　遺物観察表(1)
　表4　遺物観察表(2)
　表5　遺物観察表(3)

Ⅰ はじめに

1 遺跡の位置と環境

新湊市は、富山平野を南北に分ける呉羽山丘陵の西側に位置する。富山湾へ注ぐ庄川の、最下流東岸に広がる低湿地を中心にその市域を形成している。射水平野と呼ばれるこの低湿地の中央には、かつて、海退や土砂の堆積によってつくられた放生津潟があり、現在は富山新港として利用されている。

第1図 新湊市位置図

放生津潟は縄文時代前期の縄文海進のころは、現在の射水丘陵のあたりまで広がっていたとみられる。その後、気候の寒冷化に伴い次第に陸地化し、庄川・和田川・下条川・鍛冶川・神楽川などの諸河川によって運ばれた砂や粘土は、所々に微高地を形成していった。そして、氾濫流路間につくられたこの自然堤防洲などを中心に、この土地での人々の生活が始まったと考えられている。

高島A遺跡は、そのような微高地に形成されたと考えられる遺跡の一つである。弥生・古墳時代を主体とする遺跡で、新湊市作道・鏡宮に所在する。神楽川は、大門町円地付近で北流した和田川の支流の一つであるが、本遺跡はその神楽川の流域に南北に広がっている。

本遺跡の周辺は、新湊市の中では比較的遺跡が多くある地域として知られている。東側には隣接して、弥生時代中期以降を主体とする作道遺跡、南側には、縄文から近世までの複合遺跡である高木・荒畑遺跡、北西の高岡市には、弥生時代後期以降中世に至る遺跡として中曽根遺跡などがある。中曽根遺跡は弥生時代後期後半が中心であるが中期になる可能性もあり（高岡市1995）、作道遺跡とともに高島A遺跡との関連が注目される。

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡（1/50,000） 1 高島A遺跡 2 作道遺跡 3 朴木C遺跡 4 高木・荒畑遺跡 5 牧木中蔵遺跡 6 津幡江遺跡 7 津幡江西遺跡 8 中曽根遺跡 9 沖塚原遺跡

2　調査に至る経緯と経過

(1)　遺跡の発見

高島遺跡は、昭和47年及び平成５年発行の富山県遺跡地図では、高島Ａ遺跡と高島Ｂ遺跡の２遺跡として周知されていた。しかし、平成８年度に新湊考古歴史サークルの清氏等によって行った分布調査により、さらに周辺にも遺物が散布することが確認されたため、両遺跡を包括した上で範囲を拡張したのが、現在周知されている高島Ａ遺跡である。

この高島Ａ遺跡の隣接地において、民間のドライブイン建築の計画があがったのは平成８年度のことである。新湊市教育委員会は平成８年度１月期の農地転用許可申請によりこの計画を把握した。先述したように当時、事業計画地は高島Ａ遺跡の隣接地であった。しかし、周辺の試掘調査の実施状況などにより、遺跡が広がっている可能性が考えられたため、協議を重ねた結果、事前に試掘調査を行い、遺跡の有無、範囲などを確認することとなった。

(2)　調査の経緯と経過

試掘調査は、新湊市教育委員会が主体となり平成９年２月20日に実施した。調査対象面積は1,765㎡、発掘面積は122.7㎡である。

調査は、任意に試掘トレンチ（１～５トレンチ）を設け、遺構・遺物の有無や土層を確認した。トレンチはバックホウにより、土層を確認しながら徐々に掘り下げ、その後人力により床面、壁面を削り精査し、遺構・遺物の有無を確認した。遺構が確認されたところについては、周囲に範囲を広げて遺構の性格を確かめた。調査の結果、調査対象地の北東部分において弥生時代（中期）の遺構・遺物を確認した。

遺跡の遺存が確認された範囲は、大型車駐車場として整備することが計画されていた。調査結果をもとに協議を行った結果、計画の変更は不可能であるため、遺跡がのこる部分について、記録保存調査を実施することとなった。

本調査の発掘面積は400㎡、調査期間は平成９年４月14日から同年４月28日（延べ11日）である。工期が迫っており、また排水に時間と手間が費やされ、非常に限られた条件の中での調査であった。なお調査の費用は、事前の試掘調査については新湊市が負担し、本調査については全面的に事業者の協力をいただいた。

第３図　調査区域図（1/10,000）

Ⅱ 調査の概要

1 調査の方法

調査は事前に重機により耕作土の除去を行い、その後に任意に基点を設定し、５m毎を基準とするグリッドを設けた。座標軸は、南北方向をＸ軸、東西方向をＹ軸として基準杭を打設した。

基本層序は、第１層耕作土層（約30cm）の下に第２層茶褐色粘質土（約10cm：遺物包含層）、第３層黄灰色粘質シルト（地山）が堆積する。地山の下約１mの間は、青灰色粘土、青灰色砂土、黒褐色ピート質粘土、青灰色粘質土と続く。第２層の遺物包含層は、ほ場整備で削平され非常にうすく、所々にのこるのみで、堆積せず直接地山に至るところもある。

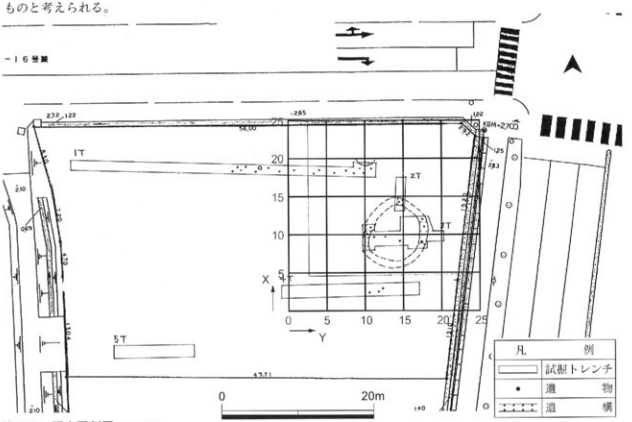
なお、地山面の標高は約1.1m～1.2mである。

2 遺構・遺物

検出遺構・遺物の概要は次のとおりである。

周溝遺構２条（ＳＤＯ１～０２）・方形周溝墓１基（ＳＸＯ１）・土坑１基（ＳＫＯ１）が検出された。このほか、ピット３基（ＰＯ１～０３）を含む小穴が、ＳＤＯ２の付近中心に検出された。遺構はほ場整備などにより上部が削平されているとみられ、いずれも約10cm～30cmの浅いものである。

遺物の出土量は少ないが、そのほとんどが弥生時代中期後葉に属する遺物であることに特徴がある。その多くが遺構埋土内からの出土であり、ＳＤＯ２、ＳＸＯ１はその出土遺物から、当該期弥生時代中期に営まれたものと考えられる。



第４図　調査区割図（1/500）

ＳＤＯ１

調査区北西端Ｘ２３Ｙ３～５付近に位置する周溝遺構である。端部分の周溝約１／４は調査区外であるが、既設の道路造成により既に失われていると思われる。周溝の平面形態はほぼ円形を呈し、外径は5.6ｍ、内径は4.5ｍである。周溝の幅は狭いところで約50㎝、広いところで約100㎝、深さは約15㎝である。削平されている可能性があるが、周溝は南側がもっとも深く、北に向かって浅くなる。その比高差は約10㎝である。周溝内部に柱穴は確認できなかった。

遺物は、ハケ目を施した弥生土器甕か壷の胴部１片が出土しているのみで、遺構の時期の断定はできない。

ＳＤＯ２

調査区ほぼ中央Ｘ６～１５Ｙ８～１７付近に位置する周溝遺構である。周溝の平面形態は楕円形を呈する。長軸の外径は8.8ｍ、内径は７ｍ、短軸の外径は7.2ｍ、内径は５ｍであり、長軸と短軸の比率は約１：３である。周溝の幅は狭いところで約80㎝、広いところで約130㎝であるが、平均は約90㎝である。深さは、現状で約10～12㎝であるが、ＳＤＯ１同様削平されている可能性がある。周溝は連続しており、明確な開口部はみられない。周溝内部には柱穴構造は確認できなかったが、小穴が７基、溝内部にかけて１基みられる。直径20㎝前後の小さいものがほとんどで、深さも６㎝～15㎝と浅い。ただ、比較的深さをもつものもあり、Ｘ１１Ｙ１４に位置する小穴は径24㎝、深さ27㎝、Ｘ１２Ｙ１１に位置する小穴は径44㎝、．深さ22㎝であり柱穴になる可能性も考えられる。

遺物は、多くが周溝の埋土内から出土している。第７図－１～４は全て周溝内から出土したものである。１・３はＸ１４Ｙ１３～１４付近で、弥生土器片数十点とともに一定の範囲から出土した。２は、Ｘ９Ｙ１６付近ではぼ１個体分がまとまって確認された。

ＳＸＯ１

調査区北東端Ｘ２１～２４Ｙ１６～２１付近に位置する。北端は調査区外であり全体プランを確認できないが、周溝の四隅が切れるタイプの方形周溝墓と考えたい。便宜上、各々の溝をＳＸＯ１－１～５と番号を割り振った。全体を検出できた周溝はＳＸＯ１－１・２の二方のみなので、以下は仮定の域をでないが、ＳＸＯ１－４を四方を囲む北端の溝と捉えると、平面形態はやや東西に長い長方形を呈する。軸方向は北からやや西に傾く。主体部や盛土は確認できなかったが、ＳＸＯ１－５とした非常に浅い落ち込み部分が主体部である可能性が考えられる。方形周溝墓全体の大きさは、検出された溝部分より周溝外側で約4.7ｍ×約6.6ｍと推測される。各溝の平面形はやや不整な長楕円形を呈し、深さは現状で30～35㎝を計る。

遺物は、ＳＸＯ１－２から第７図－５、ＳＸＯ１－３から第７図－６の弥生土器が出土している。前者の壷は、胴部部分も一括で出土しているが、胎土が非常にもろいため復元できなかった。後者の甕は、口を上にして溝内に真っ直ぐ置かれたような状態で出土したが、底部は出土していない。

ＳＫＯ１

調査区Ｘ５～７Ｙ１４～１５、ＳＢＯ２のすぐ南に位置する。平面形は細長い楕円形を呈する。大きさは長軸2.42、短軸0.69ｍ、深さ20㎝である。

ＰＯ１

調査区Ｘ６Ｙ１４、ＳＫＯ１に接して位置する。大きさは直径80～90㎝、深さは25㎝である。

ＰＯ２

調査区Ｘ１１Ｙ９、ＳＢＯ２のすぐ内に位置する。大きさは直径45㎝、深さは28㎝である。

P03
調査区X13Y7に位置する。大きさは直径24cm、深さは11cmである。第7図－7の弥生時代後期末葉月影式の高杯が出土しており、他の遺構とは時期を異にするとみられる。

3 まとめ

以上に述べた事項と問題点をあげて、今回の調査のまとめとしたい。

1 新湊市鏡宮地内に所在する高島A遺跡は、庄川右岸に形成された標高約1.5mの沖積低地に立地する。今回の調査地区は、遺跡のほぼ中央部分、調査面積は400㎡である。

2 今回の主な検出遺構は、周溝遺構2条、方形周溝墓1基である。出土遺物は弥生時代中期後葉の戸水B式期のものが大半である。後期末葉の月影式期のものもあるが、上記の遺構から出土する遺物は中期後葉のものであり、遺跡は当該期に属すると考えられる。遺跡の地山面は標高約1.1～1.2mである。

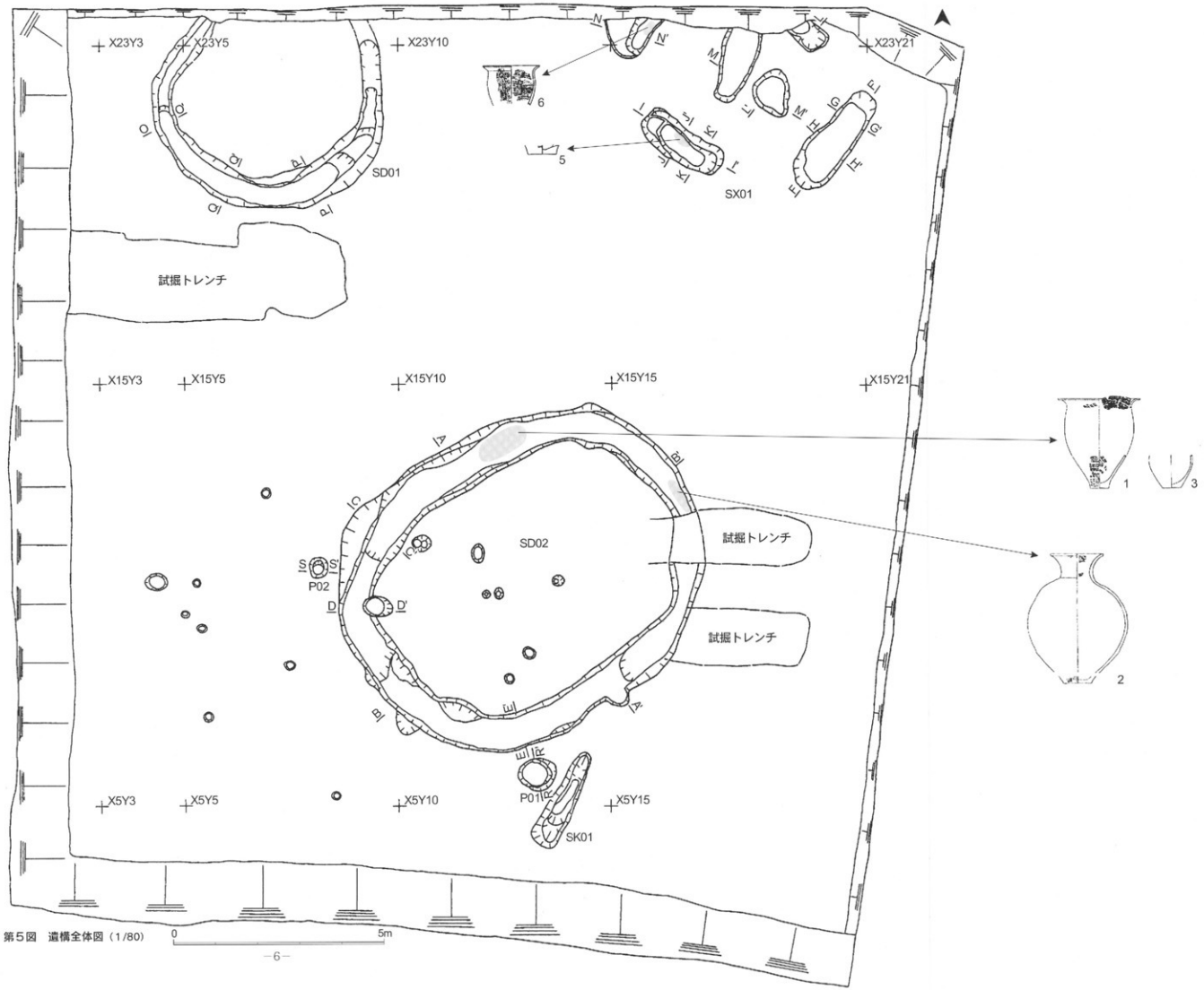
3 遺跡は、調査区の北側へも広がっていると推測される。試掘調査の結果においては調査区の西側、南側には遺跡の広がりが認められなかったことから、今回の調査区は集落の西南端部分に位置すると考えられる。

4 周溝遺構のうちSDO1は、時期を判断する遺物が出土していないため明らかでないが、SDO2と方形周溝墓（SXO1）については、その出土遺物から、これらの遺構はほぼ同時期に営まれたことが推察される。遺構間の距離は約6～7mである。集落全体において捉えないとこの距離については相対的に比較できないが、現在のところ方形周溝墓との位置関係から、今回検出した周溝遺構の性格は、墓域に伴う施設である可能性が考えられる。集落内における墓域と住居域のあり方など、今後の周辺における発掘調査例が増え、集落景観が復元できることを期待したい。

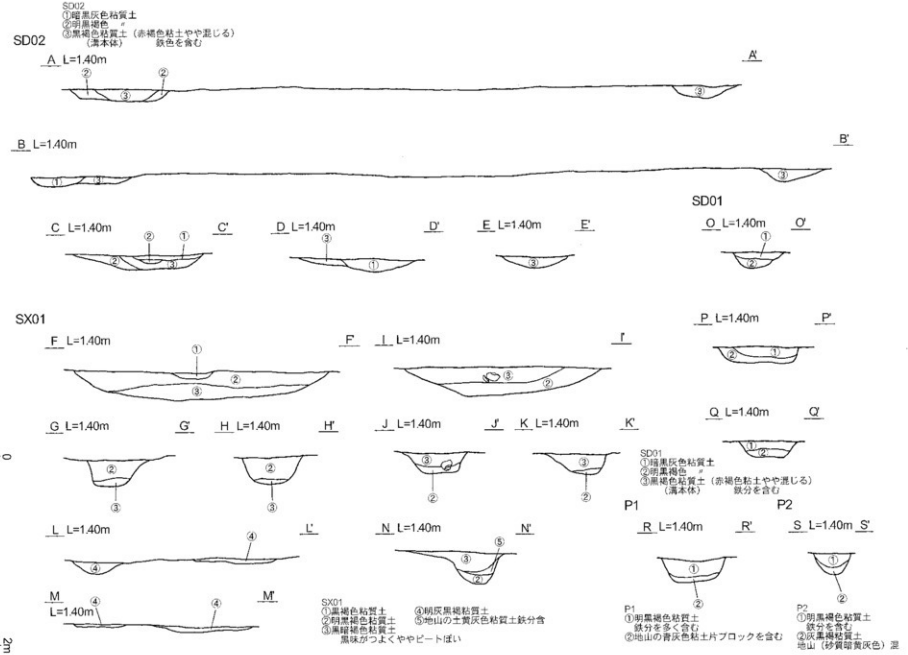
最後に今回の調査区は遺跡の空間的広がりをとらえるには非常に限られた範囲であったが、今のところ県内でも調査例があまり多くない、弥生時代中期の遺跡が存在することを確認でき、この時期には射水平野の低湿地であるこの地において定着した集落があったことを明らかにできた点で、貴重な資料と考えている。

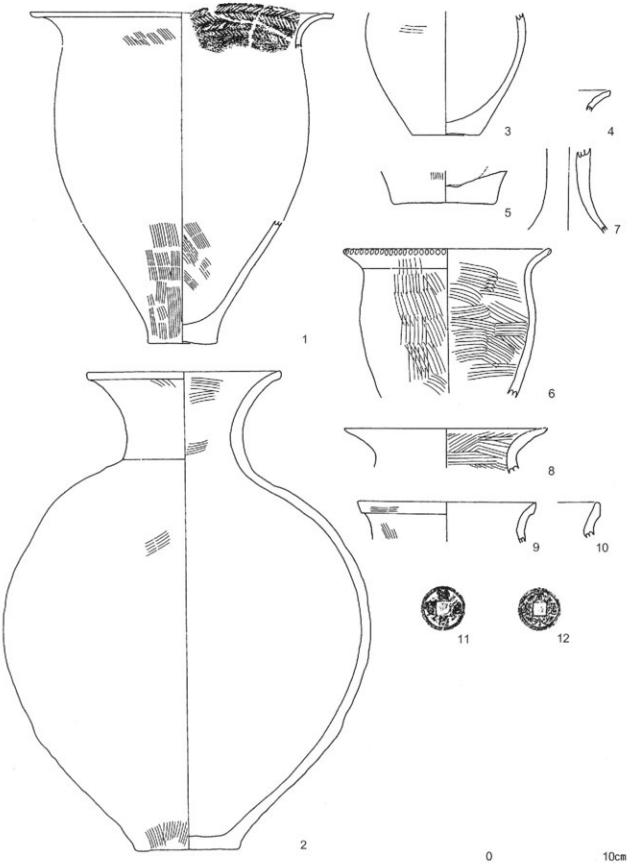
【参考文献】

上坂成次・上野章1968「高岡市石塚遺跡発掘調査概報告」『オジャラ』3
富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブOB会
高岡市教育委員会1995「高岡市埋蔵文化財調査概報第27冊 石塚遺跡調査概報Ⅲ」
金沢市教育委員会1995「上荒屋遺跡Ⅰ」第1分冊弥生時代篇
山本正敏・押川恵子1992「大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(2)-布甘沢北遺跡第3次調査-」富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会
久々忠義他1981「北陸自動車道遺跡調査報告-上市町遺構編-」上市町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター
久々忠義他1982「北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編－」上市町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター
佐原真編1983「弥生土器Ⅱ」ニューサイエンス社
橋本澄夫1996「北陸地方の弥生土器」「小松式土器」『日本土器事典』雄山閣
湯尻修平1996「戸水B式土器」『日本土器事典』雄山閣
岡本淳一郎1998「弥生時代周溝遺構に関する一考察」『富山考古学研究-紀要創刊号-』財富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所



第5図　遺構全体図（1/80）

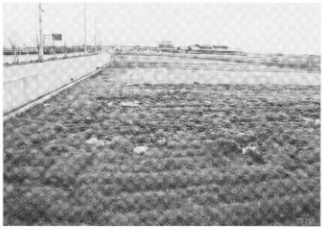

SD02
①暗黒灰色粘質土
②明黒褐色　〃
③黒褐色粘質土（赤褐色粘土やや混じる）
（基本体）　鉄分を含む
SD02
A L=1.40m
A'
B L=1.40m
B'
SD01
C L=1.40m
C'
D L=1.40m
D'
E L=1.40m
E'
O L=1.40m
O'
SX01
F L=1.40m
F'
I L=1.40m
I'
P L=1.40m
P'
G L=1.40m
G'
H L=1.40m
H'
J L=1.40m
J'
K L=1.40m
K'
Q L=1.40m
Q'
SD01
①暗黒灰色粘質土
②明黒褐色　〃
③黒褐色粘質土（赤褐色粘土やや混じる）
（基本体）　鉄分を含む
P1
P2
L L=1.40m
L'
N L=1.40m
N'
R L=1.40m
R'
S L=1.40m
S'
M
L=1.40m
M'
SX01
①黒褐色粘質土
②暗黒褐色粘質土
③黒褐色粘質土
黒味がつよくややピートぽい
④明灰黒褐粘質土
⑤地山の土質灰色粘質土鉄分含
P1
①明黒褐色粘質土
鉄分を多く含む
②地山の青灰色粘土片ブロックを含む
P2
①明黒褐色粘質土
鉄分を含む
②灰黒褐粘質土
地山（砂質暗青灰色）混
0
2m



第7図　遺物図 (1/3)

番号	分類	器種	口径	底径	器高	特徴	時期	出土遺構	備考
1	弥生土器	甕	241	54	262復元	口縁内面綾杉状文	中期	SB02	
2	弥生土器	壷	154	81	377		中期	SB02	
3	弥生土器	壷		52			中期	SB02	
4	弥生土器	甕・口縁部				口縁内面綾杉状文	中期	SB02	
5	弥生土器	壷・底部		80			中期	SX01	
6	弥生土器	甕	166			口縁外端部刻み目 外面煤	中期	SX01	
7	弥生土器	高杯・脚部					後期	SP01	
8	弥生土器	壷・	口径					表採	
9	弥生土器	壷	140				後期前半	表採	
10	弥生土器	壷					後期前半	表採	
11	貨幣	宋銭						表採	
12	貨幣	寛永通宝						SX01	

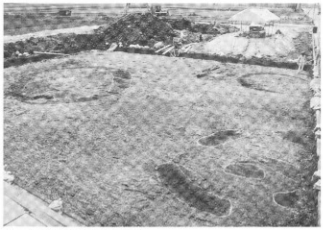
表1　高島A遺跡遺物一覧表



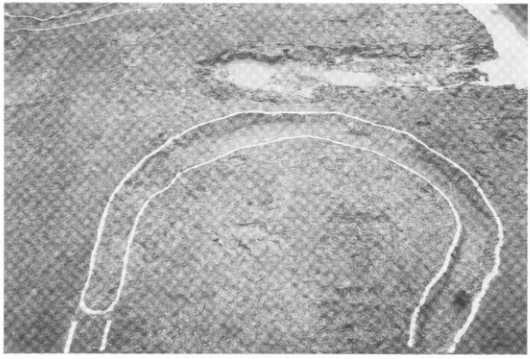
1　調査前近景

2　表土除去

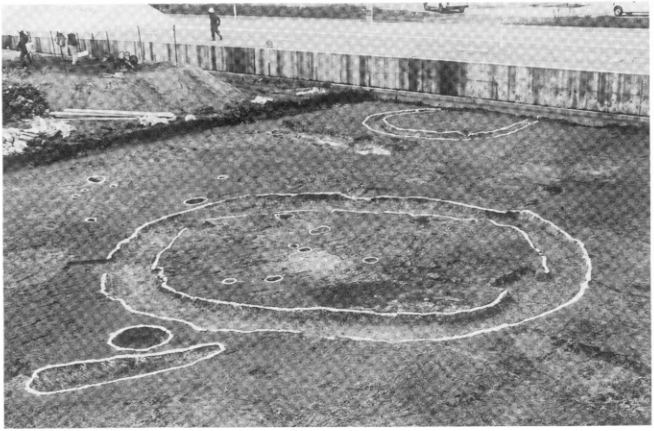
3　調査風景（北西）



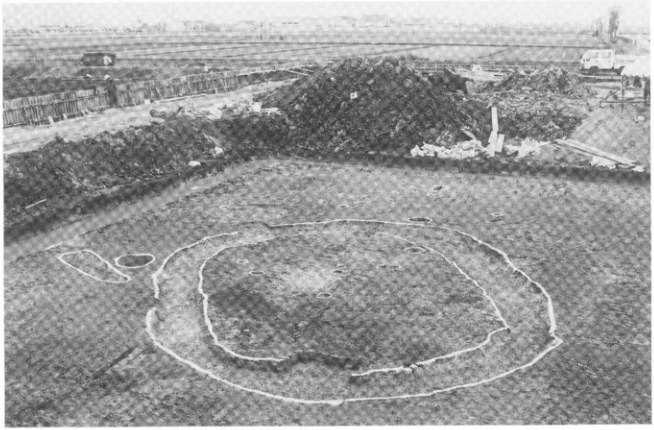
4　遺構検出状況（北東）



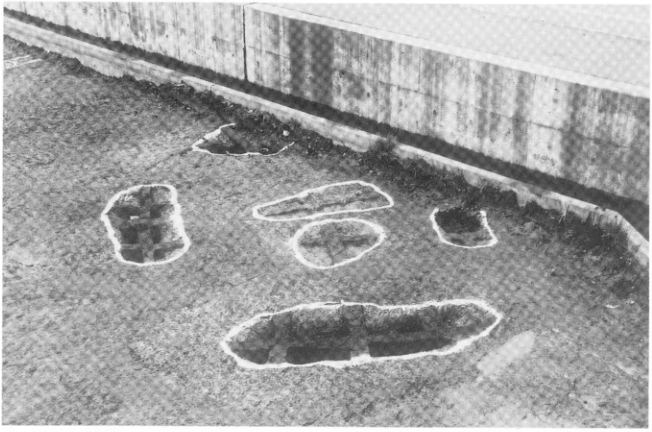
5　SDO1（北）



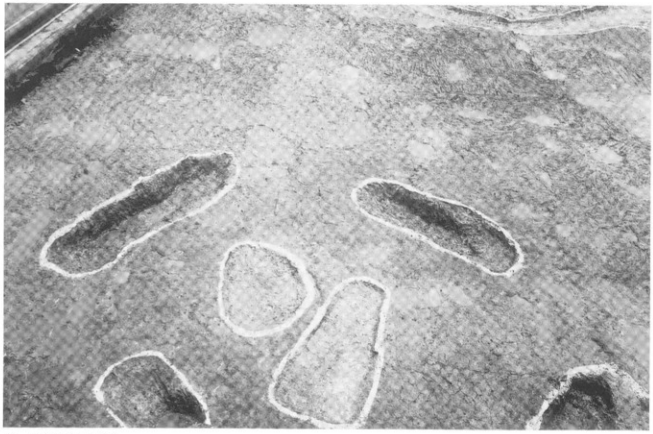
1　SD02（南東）



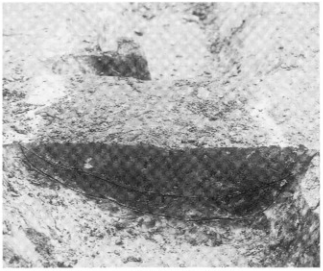
2　SD02（北東）



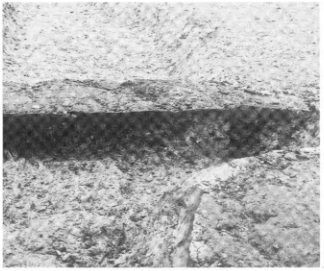
1　SD02（南東）



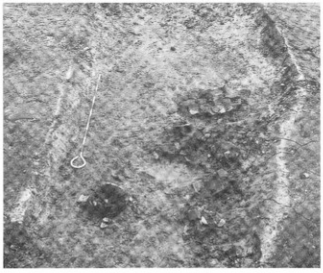
2　SD02（北東）



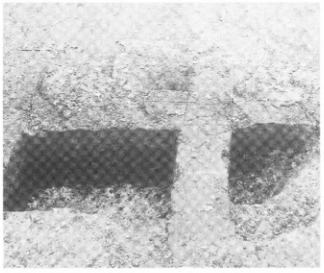
1　SD02　A－A′セクション（西側）



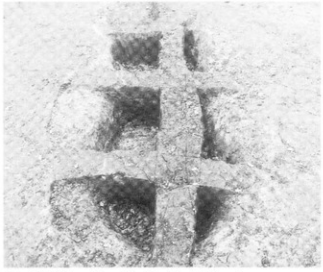
2　SD02　C－C′セクション



3　SD02　遺物出土状況



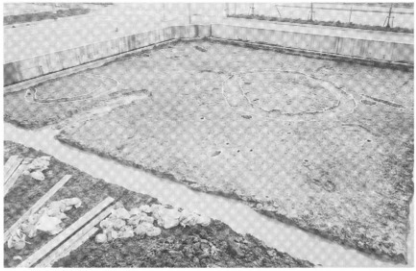
4　SX01　F－F′セクション



5　SX01　J－J′・K－K′セクション

6　SX01　遺物出土状況

1　調査区全景（南東）



2　調査区全景（南西）

3　出土遺物

【付篇】

新湊の弥生・古墳時代の遺跡について

1　はじめに

新湊市には、現在のところ周知の遺跡は53遺跡があるが、そのうち弥生・古墳時代を含む遺跡として知られているのは21遺跡である。弥生・古墳時代の遺跡における、面的な発掘調査が行われた例は過去に２例しかないが、これまでの試掘調査などによって、徐々に当該期の資料が蓄積されてきている。それらをまとめるとともに、新湊市域における弥生時代から古墳時代の遺跡の動向を探るのが目的である。

2　遺跡概説

ここでは、第９図以降の遺物図を掲載した遺跡について、遺跡の概要、発見の経緯などについて述べる。

(1)　高島Ａ遺跡

高島Ａ遺跡は、西神楽川の流域に南北に広がる遺跡である。標高は約1.5～1.8mである。遺跡の中央部である新湊市立南部中学校の東側部分が最も標高が高い。以前は南部中学校東側部分一円の高島Ｂ遺跡と、その北側の高島Ａ遺跡の２遺跡として知られていたが、遺物の散布状況などから範囲を拡充し、現在は一つの遺跡として周知されている。

今回掲載した資料は、国営付帯県営農地防災事業西部第６号排水路工事に先立ち実施した、試掘調査において出土した遺物（第９図１～９）である。試掘調査は平成９年４月21日から同年４月23日にかけて行った。調査は、既存の排水路に沿って延長400m、幅80cmの範囲で行なった。遺物の多くは、以前高島Ｂ遺跡として知られていた範囲で旧耕作土直下で検出された黒褐色粘質土の土坑内からまとまって出土している。今回、本編で報告した弥生時代中期の調査区より北約50mのところである。

(2)　作道遺跡

作道遺跡は作道集落西側、高島Ａ遺跡のすぐ東側に広がる遺跡で、西神楽川と東神楽川の間に位置する。標高は、約0.4～1.8mで、東側から西側に向けて高くなっている。

今回掲載した資料は、次の２つの試掘調査によるものである。平成９年11月21日から同年11月25日にかけて実施した、資材置場造成に係る試掘調査の際に出土した遺物（第９図10～25）、平成５年11月２日から同年11月19日にかけて実施した、農村活性化土地利用構想（作道地区）に係る試掘調査の際に出土した遺物である（第10図26～37：富山県埋蔵文化財センター所蔵）。

前者の調査区は、本編で報告した高島Ａ遺跡の調査区から、臨港線道路をはさんですぐ東側のところである。調査当時は、高島Ａ遺跡の隣接地として調査を行なったが、その後平成10年度に作道遺跡の範囲を拡充したため、現在は作道遺跡の範囲に含まれている。しかし、弥生時代中期の遺跡として、本編の高島Ａ遺跡調査区と一連のものとして捉えた方が良いかもしれない。遺物は、遺構の覆土内から出土している。

後者の調査区は前者の調査区から、さらに北西へ約400mいったところにある。遺物はその多くが、耕作土直下で検出された遺構の覆土内から出土している。遺物包含層が存在しないこと、また遺構の深さが約10～15cmと浅いことから、かつてのほ場整備による削平が伺われる。

(3)　高木・荒畑遺跡

高木・荒畑遺跡は、西神楽川と東神楽川の分流付近に広がり、新湊市布目、同高木と、大島町北高木の２市町村にまたがって広がる遺跡である。大島町に広がる範囲を北高木遺跡、新湊市に広がる範囲は高木・荒畑遺跡と呼ばれている。

今回掲載した資料は、農村活性化土地利用構想（西三ケ地区）に係る試掘調査の際に出土した遺物である。（第10図38～40：富山県埋蔵文化財センター所蔵）。調査期間は、上記作道遺跡と同じく、平成５年11月２日から同年11月19日である。遺物は、他に須恵器、土師器、珠洲があり、耕作土直下の２層に分かれる遺物包含層及び遺構覆土から出土している。

(4) 中曽根西遺跡

中曽根西遺跡は、新湊市松木から高岡市中曽根にかけて南北に広がる遺跡である。標高は約1.5～2.0mである。以前より木戸口A遺跡と知られていたが、高岡市が行なった分布調査により中曽根西と名称がつけられており、〈高岡市1995〉一連の遺跡であるため平成９年度より中曽根西遺跡と名称を変更している。

今回掲載した資料は、平成４年11月４日から同年11月24日にかけて実施した、農村活性化事業塚原地区（宅地造成）計画に係る試掘調査の際に出土した遺物である（第10・11図41～71：富山県埋蔵文化財センター所蔵）。調査では穴、川、溝跡が確認されており、内、遺跡中央付近を南北に流れる用水の東側に設けた、36トレンチで検出された川跡の底面から弥生土器が多量に出土している。

(5) 松木七口遺跡

松木七口遺跡は、新湊市宮袋集落の東側にあり、高岡市との境界線付近に位置する。標高は約1.5～1.9mである。

今回扱った資料は、上記の中曽根西遺跡と同様、平成４年11月４日から同年11月24日にかけて実施した、農村活性化事業塚原地区（宅地造成）計画に係る試掘調査の際に出土した遺物である（第11図72～99：富山県埋蔵文化財センター所蔵）。調査では、穴、溝が確認されている。内、境界線すぐ南で東西に設けた８トレンチでは弥生時代の包含層が良好に残存している。

(6) 上牧野新庄川遺跡

新湊市宮袋集落の北側、高岡市上牧野にある。現在は、地区も理解できることを考慮して、上牧野新庄川遺跡と称されている。〈高岡市教委1995〉庄川は明治33年から大正元年までの改修工事の結果、下流部分で小矢部川と分離したが、遺跡はその新しい流路の河川敷にある。

新庄川遺跡の遺跡名は、海老江久良氏によって命名されたものである。昭和39年、粘土採掘中に石剣が掘り出されたのをきっかけに、海老江久良、木江洋、吉久登の３氏により土層調査が行われた。今回掲載した資料は、その時の出土資料である（第12図100～107：海老江久良・本江洋・吉久登氏所蔵）。遺物包含層は、地表面から約80cm下の上層、約196cm下の中層、約276cm下の下層の３層がある。

(7) 河原遺跡

河原遺跡は、現在の新湊高校の南側に位置する。

今回掲載した遺物は、昭和55年４月23日の試掘調査における出土品（第12図109：富山県埋蔵文化財センター蔵）である。調査の詳細については明らかでないが、伝え聞くところによると、現在は新湊高校南側の公園となる地点において調査が行われたということである。遺物台帳には、土師器約50点が出土したと記録されている。しかし、実際には、数十点がのこるのみである。

3 まとめ

弥生時代には、気候の寒冷化により、当時の海岸線は現在よりも沖合にあり、放生津潟もさらに縮小した。放生津潟や河川の氾濫による堆積土によってつくられた平坦な土地は稲作を行なうのに適した環境であったと考えられる。ここでは、発掘調査や分布調査によって得た前掲の資料をもとに、射水平野の弥生・古墳時代の様子について、現時点で考えられる点を述べてまとめとしたい。

① 鍛冶川水系に位置する下村加茂遺跡では、弥生時代前期に相当する土器、石器、木製品、米が発見され、稲作民の存在が明らかになった（下村教委１９９９）。一方、庄川水系に位置する新庄川遺跡でも、昭和３９年の土層調査により、下村加茂遺跡とほぼ同時期ともられる縄文時代晩期末から弥生時代前期に相当する土器が出土している。このことより、北陸に弥生文化が波及した第一波が射水平野へも及んだことが推測される。

② その後の遺跡の状態は現在のところ不明であるが、次に遺跡の存在が確かめられるの弥生時代中期後葉になってからである。どのような単位で集落が営まれたかなど、ここの遺跡の内容を検討する必要があるが、神楽川水系に位置する高木・荒畑遺跡、高島Ａ遺跡と作道遺跡一帯、中曽根西遺跡周辺にはそれぞれ集落が存在した可能性が考えられる。高島Ａ遺跡の発掘調査では、弥生時代中期後葉の周溝墓、方形周溝墓などが当該期の土器とともに発見された。畿内で始まったとされる方形周溝墓が採用されるなど、最初に射水平野に及んだ弥生時代前期の文化とは系統の異なる、畿内からの影響が強い弥生文化がこの時期に波及したことを推測させる。

③ 弥生時代後期、特に後期後葉から古墳時代前期前葉にかけて、遺跡の数は増える。放生津潟東側、神通川左岸の下流一帯においても、弥生時代後期後葉から古墳時代前期にかけて遺跡が存在することがわかった。この時期には、この地の各拠点において定着した集落が営まれていたことが推測される。その背景には、安定した環境下における稲作農耕の定着があっただろう。また、これらの遺跡の多くが河川沿いに立地することから、縦横に流れる河川による水運の利便性も、農業基盤に加えて集落が定着した背景に考えられる。

古墳時代前期後葉には遺跡の数は減る傾向にあるが、単なる減少ではなく、中曽根遺跡や、高島Ａ遺跡などの中心的な勢力をもつ集落に各集落がまとめられていった可能性がある。

古墳時代中期以降は、新湊市の平野部における遺跡の数は減少傾向にある。一方南側の丘陵部では、増加する傾向にある。そこには気候の温暖化による海岸線の後退などの環境の変化や、あるいは何らかの政治的動向などによる要因があったのではないかと推測される。

最後になったが本文をまとめるにあたり、新湊考古歴史サークルとして、久々忠義氏に種々ご教示いただいたのをはじめ、青木一彦、多賀令史、井上都の各氏には大変お世話になった。また、資料提供などに際して、吉久登氏をはじめ、富山県埋蔵文化財センターに大変お世話になった。記して感謝の意を表したい。

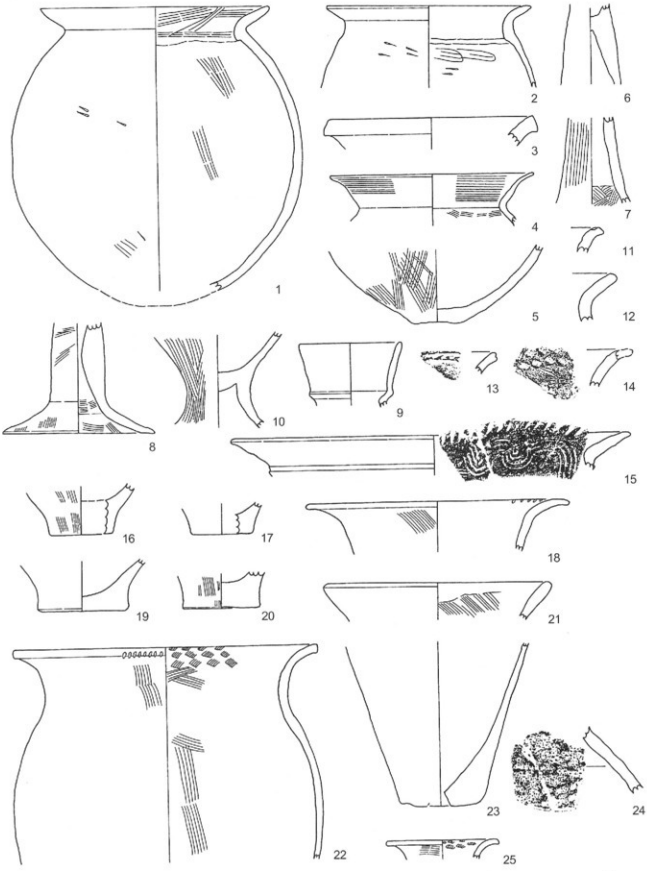
【参考文献】

大島町教育委員会1991「大島町荒俣遺跡発掘調査概要」
新湊市教育委員会1997「松木遺跡発掘調査報告」
新湊市教育委員会1998『新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ』
新湊市教育委員会1999『新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ』
下村教育委員会1999『下村加茂遺跡発掘調査報告』
高岡市教育委員会1995『高岡市埋蔵文化財調査概報第28冊 高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅵ』
富山県教育委員会1972『富山県遺跡地図』
富山県教育委員会1993『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』
山嶋明人1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
木立雅朗1981「新庄川遺跡出土遺物の紹介」『大境』第７号　富山考古学会
久々忠義他1994「射水平野の遺跡－神楽川流域を探る－」『大境』第16号　富山考古学会
間坂儀三郎1966「放生津潟西岸の牧野地区内古代遺跡」
『放生津潟周辺の地学的研究』第3集　富山地学会 伏木富山港工事事務所
佐原真編1983『弥生土器Ⅱ』ニューサイエンス社
大川清他編1996『日本土器事典』雄山閣

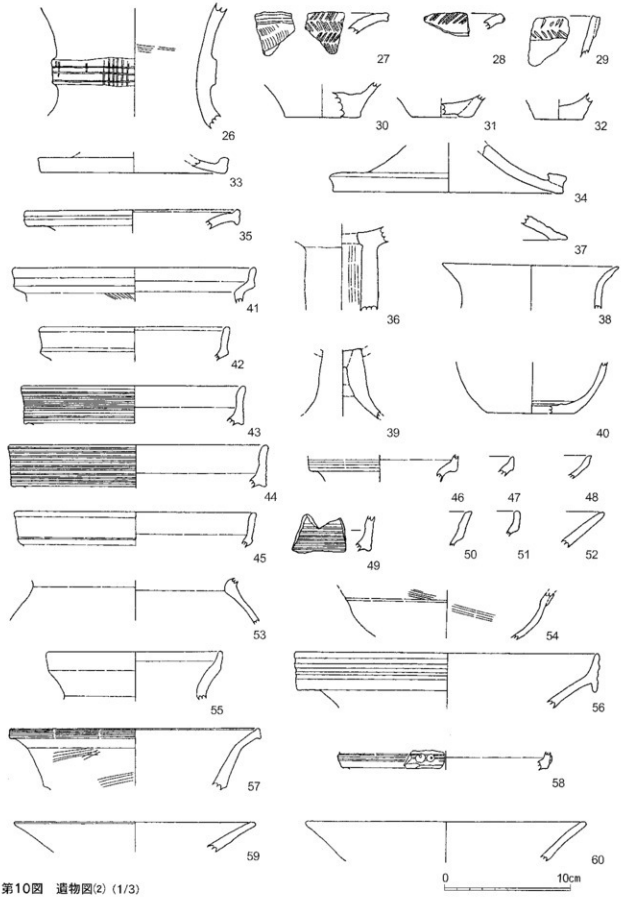
第８図　射水平野における弥生・古墳時代の遺跡（1/50,000）

遺跡	弥生時代							古墳時代				
	前期	中期		後期				前期		中期		後期
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ前	Ⅴ後	Ⅵ	3C後	4C	5C	6C	7C
1 上牧野新庄川遺跡												
2 川原遺跡												
3 青戸狭間遺跡												
4 松木七口遺跡												
5 中曽根西遺跡												
6 松木遺跡												
7 松木中鹿遺跡												
8 中曽根遺跡												
9 中曽根館遺跡												
10 牧野金屋遺跡												
11 朴木Ａ遺跡												
12 朴木Ｃ遺跡												
13 高島Ａ遺跡												
14 作道遺跡												
15 鏡宮北遺跡												
16 高木・荒畑遺跡												
17 津幡江遺跡												
18 津幡江西遺跡												
19 今井遺跡												
20 本江東遺跡												
21 本江遺跡												
22 利波遺跡												

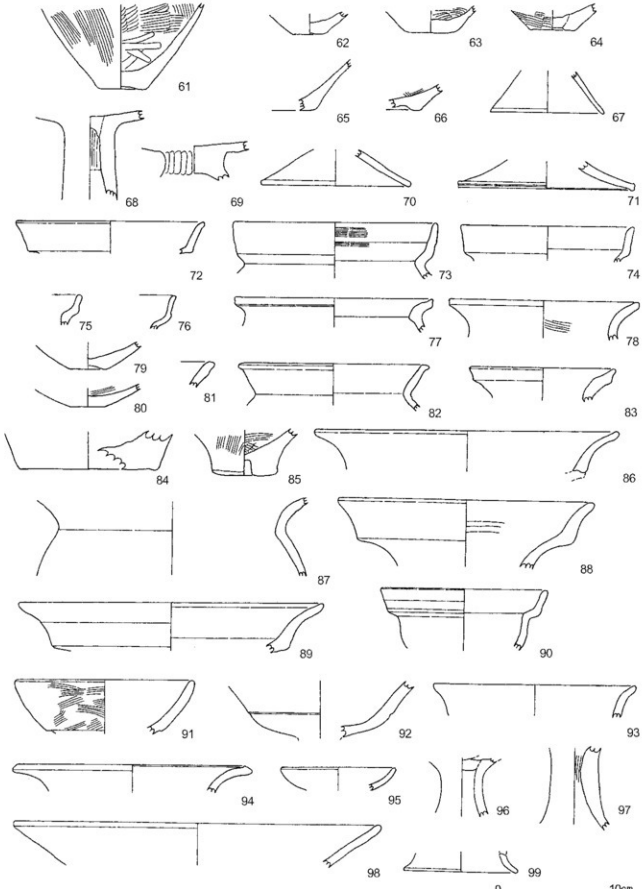
表２　弥生・古墳時代遺跡の消長表　＊第8図中の番号は、本表中の遺跡番号と対応する



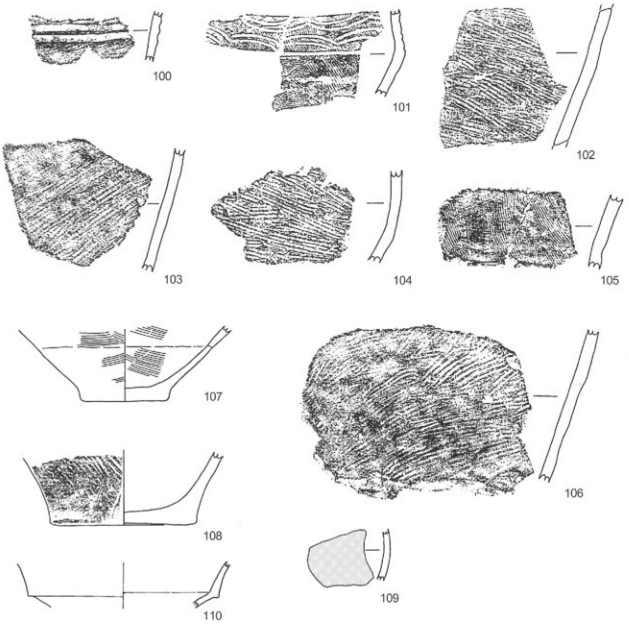
第9図　遺物図(1)（1/3）


26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
0
10cm

第10図　遺物図(2) (1/3)


61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
0
10cm

第11図　遺物図(3) (1/3)



第12図　遺物図(4) (1/3)

0　10cm

番号	遺跡名	器種・部分	口径	底径	特徴	時期	備考	出土トレンチ
1	高島A遺跡	甕	180		胴部球胴	高畠式	外面煤付着	14T
2	〃	甕口縁部	160			高畠式		14T
3	〃	甕口縁部				戸水B式		表採
4	〃	甕口縁部				高畠式		14T
5	〃	甕底部		39		高畠式		14T
6	〃	高杯脚部		120		高畠式		14T
7	〃	高杯脚部				高畠式		14T
8	〃	高杯脚部				高畠式		14T
9	〃	壺口縁部	80		内外面赤彩	月影式		11T
10	作道遺跡	高杯杯部				小松式		10T
11	〃	甕口縁部			内面斜行単線文/口唇部さざなみ状	小松式		
12	〃	甕口縁部				小松式		2T
13	〃	甕口縁部				小松式		10T
14	〃	甕口縁部			内面斜行単線文	小松式		21T
15	〃	甕口縁部			口唇部刻み目/内面横横波状文(コンパス状)	小松式		5T
16	〃	甕底部	320		底部厚い	小松式		
17	〃	壺底部		50		小松式		6T
18	〃	甕口縁部	48		口唇部刺突	小松式		11T
19	〃	壺底部	205			小松式	黒斑・剥痕あり	2T
20	〃	甕底部		70	底部厚い	小松式		3T
21	〃	甕口縁部		62		小松式		2T
22	〃	壺	174		口唇部刻み目/内面行単線文	小松式		10T
23	〃	甕			底部に穿孔あり	法仏式		10T
24	〃	壺胴部		64	外面竹管状円形列点文	小松式		6T
25	〃	甕口縁部			内面斜行単線文	小松式		2
26	作道遺跡	壺頸部	90		頸部に沈線、刻みのある隆帯	小松式		14T溝
27	〃	甕口縁部	鍾径130		口唇部内面綾杉状文	小松式		14T
28	〃	甕口縁部			口唇部内面斜行刻み	小松式か		15T土坑
29	〃	鉢口縁部			口縁部肥厚・綾杉文	小松式		7T
30	〃	甕底部		60		小松式		14T溝
31	〃	甕底部		50	上げ底	法仏式		14T溝
32	〃	甕底部		40		法仏式		14T土坑
33	〃	高杯脚部		150	脚端部肥厚	猫橋式		14T溝
34	〃	高杯脚部		180	脚端部肥厚	猫橋式		14T溝
35	〃	高杯か口縁部		170	口縁部沈線	猫橋式		14T溝
36	〃	高杯脚柱部	脚径60			猫橋式		14T溝
37	〃	蓋か脚部			外面沈線文	不明		15T土坑
38	高木遺跡	壺か口縁部	140		口縁部外反	月影式か		30T
39	〃	高杯脚部	脚径35			月影式		28T
40	〃	鉢か		70		不明		8T
41	中曽根西遺跡	甕口縁部	190		有段口縁	月影式	*木戸口A遺跡	
42	〃	甕口縁部	148			月影式		
43	〃	甕口縁部	178		擬凹線	月影式		

表3　遺物一覧表(1)

番号	遺跡名	器種・部分	口径	底径	特徴	時期	備考	出土トレンチ
44	中曽根西遺跡	甕口縁部	200		擬凹線	月影式		
45	〃	甕口縁部	190			月影式		
46	〃	甕口縁部				月影式		
47	〃	甕口縁部				月影式		
48	〃	器台口縁部				月影式		
49	〃	甕口縁部			擬凹線	月影式		
50	〃	甕口縁部				月影式		
51	〃	甕口縁部				月影式		
52	〃	高杯口縁部				月影式		
53	〃	甕胴部				月影式		
54	〃	高杯胴部				月影式		
55	〃	壺口縁部				月影式		
56	〃	器台口縁部	240		擬凹線	月影式		
57	〃	壺か口縁部	198			月影式		
58	〃	壺口縁部			外面擬凹線・外面凹形浮文	月影式		
59	〃	高杯口縁部	192			月影式		
60	〃	高杯口縁部	222			月影式		
61	〃	甕底部		34	底部上げ底	月影式		
62	〃	甕底部		26		月影式		
63	〃	甕底部		32		月影式		
64	〃	甕底部		32	底部上げ底	月影式		
65	〃	甕底部				月影式		
66	〃	甕底部			底部上げ底	月影式		
67	〃	器台脚部		88		月影式		
68	〃	高杯脚部				月影式		
69	〃	高杯底部				月影式		
70	〃	高杯脚部		118		月影式		
71	〃	高杯脚部		140		月影式		
72	松木七口遺跡	甕口縁部	150		有段口縁	古府クルビ式		22T/SD01
73	〃	甕口縁部	160			古府クルビ式		8T
74	〃	甕口縁部	140			古府クルビ式		8T
75	〃	壺か口縁部			有段口縁	古府クルビ式		22T
76	〃	鉢か			有段口縁	古府クルビ式		8T
77	〃	甕口縁部	160		くの字口縁	古府クルビ式		8T
78	〃	甕口縁部	150		ゆるいくの字口縁	古府クルビ式		22T/SD01
79	〃	甕底部		30	上げ底	古府クルビ式		8T
80	〃	甕底部		30		古府クルビ式		22T/SD01
81	〃	甕口縁部			くの字口縁	古府クルビ式		22T/SD01
82	〃	壺口縁部	150		くの字口縁	古府クルビ式		22T/SD01
83	〃	壺口縁部	115		短い有段口縁	古府クルビ式		22T/SD01
84	〃	壺底部		110		月影か		22T/SD01
85	〃	壺底部		50	底部凹みあり	月影か		22T/周辺採集
86	〃	壺口縁部	240		有段外反	古府クルビ式		22T/SD01

表3　遺物一覧表(2)

番号	遺跡名	器種・部分	口径	底径	特徴	時期	備考	出土トレンチ
87	松木七口遺跡	壺頸部	約220		くの字外反	古府クルビ式		22T/SD01
88	〃	壺口縁部	200		有段外反	古府クルビ式		22T/SD01
89	〃	壺口縁部	240		有段外反	古府クルビ式		22T/SD01
90	〃	鉢	135		有段	月影式		ST
91	〃	鉢か	140		口縁部肥厚	月影式		ST
92	〃	高杯			内外面赤彩	月影式		ST
93	〃	甕か口縁部	160		口縁部外反	古府クルビ式		22T/SD01
94	〃	壺か口縁部	190		口縁部角張る	古府クルビ式		22T/SD01
95	〃	器台脚部	90		皿状	古府クルビ式		22T/SD01
96	〃	高杯脚部	脚径30			古府クルビ式		22T/SD01
97	〃	高杯脚部	脚径40		外面赤彩	古府クルビ式		22T/SD01
98	〃	高杯口縁部	290		内外面赤彩	古府クルビ式		22T/SD01
99	〃	鉢か脚部		90		月影式		ST
100	新庄川遺跡	深鉢口縁部辺			条痕文・3条凹線・外面赤彩	縄文晩期末		
101	〃	壺形胴部			条痕文・胴上部連弧文	縄文晩期末		下層
102	〃	深鉢胴部			条痕	縄文晩期末		中層
103	〃	深鉢胴部			条痕	縄文晩期末		中層
104	〃	深鉢胴部			条痕	縄文晩期末		中層
105	〃	壺形胴部			細かい条痕文	縄文晩期末	100と同一個体	下層
106	〃	深鉢胴部			条痕	縄文晩期末		中層
107	〃	壺底部		70	内外面ハケ	弥生中期		
108	〃	深鉢底部		120	荒い条痕	縄文晩期末		中層
109	〃	壺胴部			赤彩	弥生前期		
110	河原遺跡	器台脚部				弥生月影		

表5　遺物一覧表(3)

報告書抄録

ふりがな	とやまけんしんみなとし たかしまAいせきはっくつちょうさがいよう
書名	富山県新湊市 高島A遺跡発掘調査概要
編著者名	宗 融子
編集機関	新湊市教育委員会
所在地	〒934-8555 富山県新湊市本町二丁目10番30号 TEL 0766-82-8312
発行機関	新湊市教育委員会
所在地	〒934-8555 富山県新湊市本町二丁目10番30号 TEL 0766-82-8312
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
高島A遺跡	富山県 新湊市作道・綾宮	016203	203028	36°45'12"	137°05'17"	19970414 19970428	400	民間ドライブイン造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高島A遺跡	集落	弥生時代 (中期)	方形周溝墓 周溝遺構	弥生土器	

平成12年3月31日発行

富山県新湊市
高島A遺跡発掘調査概要

編集 新湊市教育委員会
発行 新湊市教育委員会
富山県新湊市本町二丁目10番30号
印刷 (株)タニグチ印刷